

失われた真実のアメリカ史を求めて

石田 依子

Missing, Now Found, in the American History: A Research on the Controversy involving Thomas Jefferson and Sally Hemings

Yoriko ISHIDA

abstract

A shocking matter may have been proved to be fact in the American history through a DNA testing, conducted by Dr. Eugene Foster. The alleged affair between Thomas Jefferson, the third President, and his slave, Sally Hemings, may prove to be not just a story but a historical fact. It probably began in 1788, when Jefferson stayed in Paris as an American Ambassador to France. This liaison continued until 1826 when Jefferson died.

My hypothesis is that the DNA testing was to allow the story of Jefferson and Hemings to revive in American history, particularly in Black history. In other words, it exposed a nation-wide cover-up, that is, the crime of racial discrimination.

In this paper, I argue the details of the DNA testing, and explore the essence of the problems that the Jefferson-Hemings affair has raised.

Key words: Thomas Jefferson, Sally Hemings, Monticello, slavery, miscegenation, Virginia

It is difficult to determine on the standard by which the manners of a nation may be tried, whether catholic, or particular. It is more difficult for a native to bring to that standard the manners of his own nation, familiarized to him by habit. There must doubtless be an unhappy influence on the manners of our people produced by the experience of slavery among us.
THOMAS JEFFERSON, *Notes on the State of Virginia*, 1790

1998年のDNA鑑定

1998年11月、Eugene Foster博士(Dr. Eugene Foster)が行ったDNA鑑定によって、アメリカ合衆国の歴史の中でもショッキングな出来事が事実であった可能性が高いということが証明された。第三代大統領トーマス・ジェファースン(Thomas Jefferson, 1743-1826)と彼の奴隷であったサリー・ヘミングス(Sally Hemings, 1773-1835)の子孫のDNAが一致したことで、二人が愛人関係であった可能性が高いということが明らかになったのである。その関係が始まったのは、ジェファースンが駐仏公使としてパリに駐在していた時期であった1787年頃のことであったが、二人の関係はジェファースンが亡くなる1826年まで続くことになる。

当時は、有力紙を始めとして、数多くの新聞がこのDNA鑑定の結果をトップ記事として取り上げていた。テレビのニュース番組でもトップで取り上げられたことは言うまでもない。そのために通称「ジェファースンニアン」(Jeffersonian)と呼ばれる「ジェファースン愛好家」たちはパニックに陥り、いわゆる Jefferson-Hemings affair を彼らは頑として認めなかったことも記憶に新しい。

フォスター博士はヴァージニア大学の元遺伝子学教授であり、現在はイギリス在住の科学者である。誰もが認める通り、DNA鑑定は最新の科学技術かもしれないが、何世代も経たものを鑑定することはその技術の

中でも非常に困難であることは言うまでもなからう。細胞の中には「DNA」と呼ばれる遺伝を司る物質があって、細胞が分裂する時期になると細胞核の中で変化が起こり、「染色体」と呼ばれる棒状の物質が形成される。ヒトの場合、人種や性別に関係なく、一つの体細胞の核の中には46本の、より正確に言うなら23対46本の染色体が存在する。その染色体の中に「性染色体」というものがあり、それは「Y染色体」と「X染色体」に分けられる。このYとXの組み合わせによって、男性か女性かということが決まるのである。男性は母親からX染色体を、父親からY染色体をもらい受けるが、女性は母親と父親から二つのX染色体を一つずつもらい受ける。つまり、男性の精子の中に存在するY染色体に含まれる遺伝子連鎖群は代々父親を通じて男子だけがそれを受け継ぐことができるのである。二百年以上の時間と何代もの世代を経ているにもかかわらず、ジェファーソン家のDNA鑑定が可能だったのはこれらの理由によるものである。したがって、直接の男性から男性へという場合は、多くの世代を経ても損なわれることはなく、直に続いていく。女性の場合はそれが不可能なのである。言い換えるなら、主体が同じDNAを引き継いでいるということのためには、同一血統内の息子の息子でなければならないのである。娘しかいなかったトーマス・ジェファーソンとマーサ・ウェルズ・ジェファーソン(Marth Wayles Jefferson, 1748-1782)夫妻の子孫からはDNA鑑定は不可能だった²。ジェファーソンの叔父のフィールド・ジェファーソン(Field Jefferson, 1702-1765)の子孫はそれぞれの代で息子が存在していたので、その家系から血液が採取されたわけであるが、それはジェファーソンの父親であるピーター・ジェファーソン(Peter Jefferson, 1707 - 1757)とフィールド・ジェファーソンが実の兄弟であると仮定されてのことだった。

一方、サリー・ヘミングスの側は、彼女の末息子のエストン・ヘミングス(Eston Hemings, 1808 - 1866)の子孫から血液が採取された。フォスター博士はそれぞれの採取した血液をイギリスで鑑定したのだが、それに従事した科学者たちには何について調べているのかは知らされていなかった。標本は匿名にするためにコードネームが付けられた。結果は、フィールド・ジェファーソンの子孫とエストン・ヘミングスの子孫の間には血縁関係が認められたが、ヘミングス一族とカー一族の間には一切の繋がりはないというものであった³。この結果は、最初にイギリスの科学雑誌『ネイチャー』に掲載された。しかしながら、ここで注意すべきことは、フォスター博士自身も認めるように、このDNA鑑定は決定的なものではないということである。サリー・ヘミングスが「ジェファーソン家の誰か」と関係があったことは確実であるが、それがトーマス・ジェファーソンだったとは言い切れないからである。前述したように、ジェファーソンには娘しかいなかったため、その直系の子孫からの鑑定は不可能だった。私が本稿の冒頭でジェファーソンとヘミングスの関係について「事実であった可能性が高い」という書き方をし、「事実であった」と言い切らなかった理由はそこにある。『ネイチャー』の記事における見出しは、"Jefferson fathered slave's last child"（「ジェファーソンは奴隷が生んだ末息子の父親だった」）というものだったが、当然、ジェファーソン愛好家たちがこの見出しを非難したことは想像に固くない。そのような非難の投書に対する博士の答えは以下の通りである。

...The title assigned to our study was misleading in that it represented only the simplest explanation of our molecular findings; namely, that Thomas Jefferson, rather than one of the Carr brothers, was likely to have been the father of Eston Hemings Jefferson.....

We know from the historical and the DNA data that Thomas Jefferson can neither be definitely excluded nor solely implicated in the paternity of illegitimate children with his slave Sally Hemings. When we embarked on this study, we knew that the results could not be conclusive, but we hoped to obtain some objective data that would tilt the weight of evidence in one direction or another. We think we have provided such data and that the modest, probabilistic interpretations we have made are tenable at present.

(by Eugene A. Foster, "The Thomas Jefferson paternity case" in *Nature*, vol.397. 7 Jan. 1999)

我々はこのDNA鑑定をどのように解釈すべきなのか。先述したように、それはエストン・ヘミングスの子孫はトーマス・ジェファーソンの直系の子孫であったということ完全に証明したわけではない。それが証明したことは、エストンの子孫はカー一族ではなく、ジェファーソン一族と血縁関係があったということだけである。確かにDNA鑑定は二百年前から取り沙汰されてきたミステリーを解決することに可能な限り近づいたのだろうし、サリー・ヘミングスの存在が今になってようやく日の当たる場所に連れ出されたのもDNA鑑定のおかげかもしれない。しかし、それは我々が信頼しうるすべてというわけではない。科学的証拠は、既に現存する歴史的証拠と並行して検証されなければならないからである。結局のところ、科学と歴史は相互を補い合うものなのである。「冷静」な科学は、人間の感情によって動かされてきた歴史や政治が遂には解決できなかった論争を解決する一歩を踏み出したことは疑うべくもないことであるが。

ヘミングス一族のルーツ

ヘミングス一族のオーラル・ヒストリーと、サリー・ヘミングスの三男であるマディソン・ヘミングス (Madison Hemings, 1805-1877) の回想録によると、サリーの祖母はフル・ブラッドのアフリカ人女性であり、プランター (農園主) 兼奴隷商人であったジョン・ウェルズ (John Wayles, 1715-1773) によって所有されていた。ジョン・ウェルズという人物はジェファーソンの妻マーサの父親に当たる。つまり、彼はジェファーソンの義理の父親になるわけである。ウェルズの知り合いにヘミングスという姓をもつあるイギリス人の捕鯨船長がいたのだが、この人物は定期的にイングランドとヴァージニアのウィリアムズバーグを行き来していた。このアフリカ人女性の名前が何であったか、あるいは彼女がアフリカのどの地域から連れて来られたのかということは知られていない。しかし、大西洋の奴隷貿易から推察するに、この女性はおそらくはアフリカのある地で拉致され、強引にアメリカ大陸に運ばれてきたことは疑う余地はなからう。

先述したように、彼女はアメリカでジョン・ウェルズの持ち物であったが、彼はある時、一時的にヘミングス船長に彼女を貸与したのである。ヘミングス船長はウィリアムズバーグに滞在している時に、この女性を妊娠させる。二人の間にはエリザベス (Elizabeth Hemings, 1735-1807) という娘が生まれた⁴。こうしてヘミングス一族のルーツが始まったのである。

ヘミングス船長はウェルズにこの母子を譲り受けたいと申し出て、二人を自分と共にイギリスに連れて帰るために巨額の金額を支払うと言った。しかし、ウェルズは肌の色の薄い混血の赤ん坊を見ると、その成長に興味を持ち、手放すことを拒否する。途方に暮れたヘミングス船長は、最終的に母子を盗み出すという計画を練るに至る。しかし、ウェルズ家所有の奴隷の一人がこの計画を密告し、ジョン・ウェルズはこのアフリカ人女性とエリザベスを監視下に置くために屋敷の中に閉じ込めてしまった。こうしてヘミングス船長の二人を盗み出すという計画は挫かれ、以来、彼は母子と二度と会うことはなかった。

モンティチェロ⁵の元奴隷であったアイザック・ジェファーソン (Izaak Jefferson, 1781-?) は、回想録の中でエリザベス・ヘミングスを「利口なミュラトの女性」と述べている⁶。ヘミングス船長とアフリカ人女性の間でできたこの娘は、ウィリアムズバーグの西数マイル離れたところのヴァージニア州チャールズ・シティー群にあるウェルズの屋敷で育った。勤勉な働き手であった彼女はウェルズの娘マーサ (後のジェファーソン夫人) 付きのメイドとなった。エリザベスはある奴隷と白人の大工との間にそれぞれの子供を数人もうけているが、後に論争の的になるのは、彼女とジョン・ウェルズとの間でできた六人の子供たちである。

ジョン・ウェルズは、三回目に再婚した妻が亡くなると、1761年にエリザベス・ヘミングスを妾にした。彼女とウェルズは同意の上で性的関係をもっていたのか、あるいは奴隷主と女奴隷の間ではよくある場合のように、搾取的なものだったのかということについての信憑性のある記録は残っていない。しかし、そのどちらにしても、エリザベスはウェルズの子供を六人も産んだのである。その中で1773年に生まれた末娘がサリー・ヘミングスだった。六人の子供たちは全員がヘミングス姓を名乗っていた。彼らは六人ともが白人としてパスできるほど肌の色が薄かったという。

1773年にジョン・ウェルズが亡くなると、エリザベスと六人の子供たちを含めたウェルズ家の奴隷たちは娘のマーサに相続される。そして、マーサがトーマス・ジェファーソンと結婚した折に、エリザベスも子供たちもジェファーソン所有の奴隷となったわけである。エリザベス・ヘミングスはモンティチェロの奴隷のヒエラルキーの中でも頂点に君臨し、プランテーションのもっとも重要な部分、特に家内のことを司っていた。彼女は1807年に72歳で亡くなっている。

上述したように、サリー・ヘミングスは母のエリザベスと共に最終的にはトーマス・ジェファーソンの所となるのだが、つまり、サリーはジェファーソンの妻マーサの父親であるジョン・ウェルズとエリザベスの間でできた娘なので、マーサとは腹違いの姉妹ということになる。そして、マーサの死後、この物語は始まる。モンティチェロの奴隷として成長したサリー・ヘミングスは十四歳の時にジェファーソンの次女マリア (Maria Jefferson, 1778-1804) 付きのメイドとして、駐仏公使として先に行っていたジェファーソンより数年遅れてパリに渡る。時まさしく革命の匂い漂う1788年⁷、二人の間に関係が出来たのはパリにおいてであった。サリー・ヘミングスが15歳、ジェファーソンが45歳のときであった。当時のフランスは植民地における奴隷制を廃止しており、したがってフランス本国でも奴隷制は存在しなかった。すなわち、サリーは当地においてジェファーソンの元から逃げ出せば、確実に自由を手に入れることが出来たのである。にもかかわらず、彼女は奴隷の身分のままでジェファーソンと共にヴァージニアに帰ってきてしまう。妻のマーサに先立たれたジェファーソンは、彼女との約束どおり生涯再婚することはなかったが、サリー・ヘミングスとの関係は1826年7月4日に彼が息を引き取る瞬間まで、実に38年間に渡って続いていく。

Jefferson-Hemings affair

先述したモンティチェロの元奴隷であるアイザック・ジェファーソンの1847年の回想録によると、サリー・ヘミングスは「非常に肌の色の薄い、背中まで真直ぐな髪を垂らしたたいそうな美人」であったという⁸。彼女がトーマス・ジェファーソンの伝記に正式に登場したのは、1974年に出版された *Thomas Jefferson: An Intimate History* においてであった。著者であるカリフォルニア大学の歴史学の教授であった故フーン・ブローディ女史 (Fawn M. Brodie) は、本書においてサリー・ヘミングスをジェファーソンの人生の中でも最も重要な位置に置いている。ヘミングスの存在を認めなかった権威あるジェファーソン研究者によるそれ以前の伝記とは違って、本書はジェファーソンとヘミングスの愛情を前面に押し出したという点で画期的な伝記であった。しかし、ブローディ女史は、奴隷主と女奴隷という以上の関係が二人の間にあったと仮定したことで、歴史家仲間から非難され、研究者生命を失うほどの窮地に立たされたのだった。例のDNA鑑定が行われる24年前のことであった。

この話が公衆に対して始めて暴露されたのは、1802年だった。それは、当時のヴァージニアの新聞であった *Richmond Recorder* に掲載されたジェームズ・カレンダー (James Thompson Callender) という人物によって書かれた記事である⁹。ちょうどその頃、ジェファーソンは大統領二期目の選挙を控えていた。カレンダー自身はフェデラリスト (連邦主義者) ではなかったので、共和党のジェファーソンを攻撃したわけではないが、彼は個人的な逆恨みによってこの記事に公にした。この件については紙面の都合上、本稿では敢えて触れないこととする。

新聞の記事の内容は以下のようなものであった。

It is well known that the man, whom it delighteth the people to honor, keeps and for many years has kept as his concubine, one of his own slaves. Her name is SALLY. The name of her eldest son is TOM. His features are said to bear a striking although sable resemblance to those of the President himself. The boy is ten or twelve years of age. His mother went to France in the same vessel with Mr. Jefferson and his two daughters.

(by James Thompson Callender, *Richmond Recorder*, September 1, 1802)

カレンダーは一年間に渡ってサリー・ヘミングスのことでジェファーソンを中傷するペンを止めなかった。1803年にジェームズ川でその溺死体が発見される直前まで。それが事故死であったのか、殺人であったのかは明らかにされていない。白人至上主義で、いつも黒人の存在に対して嫌悪感を顕にしていた彼は、一年に渡る記事の中でサリー・ヘミングスを口汚く罵っていた：“the Negro wench and her mulatto litter” (「黒人売女とがらくた同然の混血の子供」)、“the African Venus” (「アフリカの愛欲女」)、“mahogany colored charmer” (「マホガニー色の売春婦」)¹¹。世間では、サリー・ヘミングスを酷評する歌や詩がもてはやされていた。「お色気サリー」「奴隷の売春婦」「黒人サリー」「黒人の妾」、これがヘミングスへの呼び名だった。

彼女がこのように言われていたのは、当時の南部社会では黒人は人間と考えられていなかったからである。奴隷はそれ以上の何ものでもありえなかった。それは動産であり、取引される対象であった。売り買いされるもの、精神を持たないもの。たとえ彼女がトーマス・ジェファーソンの愛人であったにせよ、サリー・ヘミングスが奴隷であったことに限って言うなら、彼女の身体の中に「白人の血」が流れていようとも、ヘミングスは白人社会には仲間入りできなかったのだ。当時も、今も。

DNA以前、この二百年の間、ジェファーソンの白人の子孫たち、その愛好家や歴史家の態度は一貫していた。サリー・ヘミングスの相手はジェファーソンではないと主張することに。彼らの言い分はこうであった。奴隷の所有者と権利を剥奪された奴隷の間に如何なる愛情が存在するというのか。仮にそのような関係が存在したとしても、それは搾取であったと保守的な見解は指摘する。アメリカという国家においては、黒人と白人の間の純粋な愛情については今だもって懸念を抱いているからである。昔も、今もである。ヴァージニアス・ダブニー (Virginius Dabney) やデュマ・マローン (Dumas Malone) のような権威あるジェファーソン研究者を始めとした多くの歴史家がジェファーソンとヘミングスの関係など全く不可能なことで、それを口にするのは「歴史への冒瀆」だと主張してきた。結局のところ、Jefferson-Hemings affair はアメリカ合衆国ではタブーとされ、二百年の長きに渡ってサリー・ヘミングスの存在は闇に葬られてきたのだ。この国では「リスク」を冒さずしてこの物語を語ることが出来なかったである。この物語を黒人女性が性的に搾取

された 38 年間として解釈したならば、白人アメリカは「ヴァージニアの誇り高き男」が風俗を壊乱するはずがないとしてこの物語を破棄してしまうことになる。反対に、純粋な愛情物語としてこの話を語れば、miscegenation(異人種混合)の罪¹²まで犯してジェファーソンが黒人女性を愛するはずがないと白人アメリカは考える。いずれにしても、ジェファーソンとヘミングスの物語は白人アメリカにとっては都合の悪い「アメリカ史」だったのである。

合衆国の多くの華々しい大統領たち、たとえばアンドリュー・ジャクソン(Andrew Jackson, 1767 - 1845)、ウォーレン・ハーディング(Warren G. Harding, 1865-1923)、フランクリン・ルーズベルト(Franklin Roosevelt, 1882-1945)、ジョン・F・ケネディー(John F. Kennedy, 1917-1963)、ウィリアム・クリントン(William Clinton)、彼らにもスキャンダルはあった。しかし、1998 年当時のクリントン大統領を除いては、非難を浴びせられたものは誰もいなかった。当のトーマス・ジェファーソンですら、若い頃に友人の妻を誘惑したこと¹³、サリー・ヘミングスと関係が出来る前に、パリでマリア・コズウェイ(Maria Cosway)という既婚女性と一時的にでも恋愛関係にあったことに眉を顰めた者は誰もいなかった。それらは不貞であっても、「異人種混合」のそれではなかったからである。

ジェファーソンとヘミングスの物語がこれほどまでに軽蔑され、DNA 以前は宙ぶらりんの状態であったのは、それが人種に関する問題だからである。Jefferson - Hemings affair とは、単に三代大統領であるトーマス・ジェファーソンに奴隷の愛人がいたかというようなレベルの問題ではない。この問題のより重要な局面は、現代のアメリカ人の、特に白人アメリカ人の人種に対する見解とは如何なるものか、黒人と白人のしかるべき関係とは如何なるものかということに繋がっていく。この物語を現代社会において扱うことは、アメリカには白人優位主義という概念が存在するという把握することにもなるのである。歴史は奴隷であった人間に対する無関心、その子孫たちの感情への軽視、そして黒人を奴隷にしてきた人々の利益を守りたいという感情を提示してきたのだ。それは、1998 年の DNA 以前、この問題を扱ってきた研究者たちが、自分たちがあまりにも盲目であったことに気づけなかったということからも察せられるだろうし、今でもってジェファーソンとヘミングスの問題には成されなければならない研究がどれほど沢山あるかということをも物語っているのである。「この問題を口にするのは歴史への冒瀆」だと主張したのはデュマ・マローンであったが、真実に蓋をすることこそが「歴史への冒瀆」ではないのか。

トーマス・ジェファーソンという男

トーマス・ジェファーソンとはどういう男かということを知ることには困難極まりないことのように思える。ジェファーソンの矛盾については以前から取り沙汰される問題であるが、ジェファーソン研究者が掲げる最大の疑問は、自己のプランテーションで 235 人も黒人の「不可侵の権利」を剥奪しておきながら、どうやって彼は「人間は不可侵の権利、幸福の追求を与えられており…」などと書くことが出来たのかということであろう。実際、ジェファーソンは支離滅裂な人間であったようだ。人生の初めの頃には、彼は奴隷解放の熱心な支持者であり、独立宣言を起草した時にはイギリス国王ジョージ三世を「人間の本質に対して残酷な戦いをしかけた」ことで非難する一節を書き入れた。しかし、南部議会はこの一節に異議を唱え、したがってそれは最終稿では削除された¹⁴。そして、独立宣言の起草以上にここで挙げられるべき問題は、このようにジェファーソンが奴隷解放に力を注ぎつつも、その片方では黒人に嫌悪感を示す文章を書き、またその一方で黒人女性を愛人としていたということに尽きるのである。

The first difference which strikes us is that of colour. Whether the black of the negro resides in the reticular membrane between the skin and scarf-skin, or in the scarf-skin itself; whether it proceeds from the colour of the blood, the colour of the bile, or from that of some other secretion, the difference is mixed in nature, and is as real as if its seat and cause were better known to us.....They have less hair on the face and body. They secrete less by the kidneys, and more by the glands of the skin, which gives them a very strong and disagreeable odour. This greater degree of transpiration renders them more tolerant of heat, and less so of cold, than the whites.¹⁵

ジェファーソンは『ヴァージニア覚書』におけるこの一節で、黒人は白人よりも肉体的にも劣っているということを示し、自らが抱く黒人への嫌悪感を顕にしている。興味深いことは、ジェファーソン愛好家たちはこの一節を利用して、黒人に嫌悪を抱いている彼が黒人女性であるサリー・ヘミングスと関係を持つはずが

ないと主張してきたことである。彼らはそれを盾にして、ジェファーソンとヘミングスの問題が議論されることすら滑稽だというのが、この一節だけに固執した考え方こそ私には滑稽に思われる。白人アメリカ人たちはジェファーソンを高貴な地位に据えて賛美するが、彼にも普通の人間と同じように「弱さ」や「脆さ」があったのだということを彼らは忘れていた。そしてこの「弱さ」はジェファーソンを決して高潔さから引き摺り下ろすものではないはずである。かえって、それがあからこそ、彼を人間らしいコンテクストの中に置くことが可能となるのである。上記の一節に固執して、トーマス・ジェファーソンは黒人女性には絶対に魅力を感じないと仮定することは神話でしかない。「アメリカを作った男」という彼の偉大さと、サリー・ヘミングスとの関係は相反するものではないはずである。一人の人間が行った行為である以上、それらは相互に関り合っているはずである。

現存する奴隷体験記からもわかるとおり、奴隷主と女奴隷の関係はそのほとんどが性的虐待であったことは疑う余地はない。かつてのタブーを破った DNA 鑑定以降においても、歴史家たちは様々な憶測を廻らして、ジェファーソンとヘミングスの関係の中にそれなりの「理由」を見出そうとしてきた。それは、前章でも言及したように、人種の問題が絡んでいたのである。二人の関係は搾取でないとしても、それは「取引」であったのではないかと、つまり、ジェファーソンは快楽を、ヘミングスはモンティチェロでの安定した地位と子供たちの自由のために、という具合に。しかし、トーマス・ジェファーソンとサリー・ヘミングスの問題を調査していくにつれて、私はある考えに到達した。我々は今までジェファーソンとヘミングスが置かれた立場に捕らわれすぎていたのではないかと。率直に言って、互いに惹きつけられている男女の間に、相手がどの人種に属するかという考えなど入りこむ余地があるのだろうか。このように考えると、『ヴァージニア覚書』から発生するジェファーソンの矛盾について説明がつくように思われる。ジェファーソンとヘミングスを取り巻く状況に惑わされ過ぎて、二人が結び付いたことに対して、「愛情」というあまりにも簡単な理由の裏側に、人はなぜか多くの駆け引きを見出そうと無駄な思考を重ねてきたのではないかと。結局のところ、Jefferson-Hemings affair は、ジェファーソン自身の葛藤の物語ではなく、ジェファーソンとヘミングスの関係を認めるための「アメリカの葛藤」の物語なのである。

ヘミングスの子供たち

私の立場を明らかにしておこう。つまり、トーマス・ジェファーソンとサリー・ヘミングスの関係はあったのか、なかったのか。DNA 鑑定の章でも述べたように、科学は二人の間に関係があったということを全面的に証明したわけではなく、その「可能性」がかなりの程度であったということを証明したに過ぎない。繰り返して言うが、科学的証拠と歴史的証拠を併用して始めてそれなりの見解が得られるのである。そして、その結果、私が得た見解はイエス、サリー・ヘミングスの子供たちの父親はトーマス・ジェファーソンであったという推定である。歴史的な文書の中でも私が特に信頼しようと思うものは、ヘミングスの三男マディソン・ヘミングスの 1873 年の回想録である。彼は次のように語っている。

My mother accompanied her as a body servant. When Mr. Jefferson went to France Martha was just budding into womanhood. Their stay (my mother's and Maria's) was about eighteen months. But during that time my mother became Mr. Jefferson's concubine, and when he was called back home she was enciente by him.....To induce her to do so he promised her extraordinary privileges, and made a solemn pledge that her children should be freed at the age of twenty-one years. In consequence of his promise, on which she implicitly relied, she returned with him to Virginia. Soon after their arrival, she gave birth to a child, of whom Thomas Jefferson was the father. It lived but a short time. She gave birth to four others, and Jefferson was the father of all of them. Their names were Beverly, Harriet, Madison(myself), and Eston - Three sons and one daughter. We all became free agreeably to the treaty entered into by our parents before we were born. ¹⁶

マディソン・ヘミングスは、彼の母親、すなわちサリー・ヘミングスがトーマス・ジェファーソンの愛人であり、彼女の子供たちの父親はジェファーソンであると語っているが、彼のこの証言は歴史家から無視され、ジェファーソン-ヘミングス研究の中で排除されてきたのである。それは、アメリカ合衆国においては黒人の存在が「不可視」なものであったことと無関係ではない。以前、ジョージ・ワシントン(George Washington, 1732-1799)の子孫だと主張する黒人が現れて大騒ぎになったが、それは嘘だということが直ぐに判明したことがあった。マディソン・ヘミングスの証言もそれと同じようなレベルのものにしか受け取られなかったの

だ。確かに、彼がすべて本当のことをいっているとは限らないし、本人は嘘をついている意識はなくても、それが結果的に事実ではなかったということは十分に考えられることである。しかし、少なくとも DNA 鑑定はマディソン・ヘミングスが全くのでたらめを語っていたのではないということを証明したのである。DNA 鑑定という科学的証拠とマディソン・ヘミングスの回想録という歴史的文書は、互いを補い合うことによって我々をより真実に近いところに導いてくれたと言えるのだ。

マディソンが回想録の中でも語っているように、サリー・ヘミングスとトーマス・ジェファーソンの間には 5 人の子供が生まれている¹⁷。ジェファーソンはヘミングスとの約束どおり、子供たち全員を 21 歳になる頃には解放している。次男のビバリー(Beverly Hemings, 1798-?)と長女ハリエット(Harriet Hemings, 1801-?)は記録の上では「逃亡」ということになっているが、それは事実上の「解放」であった。当時、奴隷が「逃亡」した場合、当然のことながら追手が放たれ、多くの場合、逃亡奴隷はその追手に捕まり、プランテーションに連れ戻され、鞭打たれるかあるいは二度と逃亡できないように足の指を切り落とされるかという運命を辿った。ところが、ビバリーとハリエットの場合は、「逃亡」する時には馬車まで用意され、当面の生活に困らないようにジェファーソンによって金銭まで与えられたという。その後二人は、それぞれワシントン DC とフィラデルフィアで白人社会にパスしていったがその後の消息はわかっていない¹⁸。マディソンとエストンの場合は記録の上でも「解放」となっている。ジェファーソンの死後、マディソンは黒人としてのアイデンティティを貫き、エストンは白人社会にパスしていく。

サリー・ヘミングス自身は、ジェファーソンによって最後まで奴隷の身分から解放されることはなかった¹⁹。彼の死後、彼女はジェファーソンの娘マーサの所有となり、彼女によって自由を与えられる。この「解放」が何を意味するかは容易に推測できるだろう。それはサリー・ヘミングスが「沈黙」と引き換えに手に入れた「自由」だったのではないのか。ヴァージニアではたとえ誰もが彼女の立場を知っていたとしても、彼女自身の口からは決してそのことを語らないということの引き換えに。

ここである状況を設定してみよう。たとえばあなたが 1802 年頃にヴァージニア州アルビマーレ郡で暮らしていたとしよう。あなたはトーマス・ジェファーソンとサリー・ヘミングスの情事の噂を耳にし、ある新聞の記事からもそのことを知る。この告発は当時のジェファーソン擁護者によって精力的に否定される。その後あなたは何らかの理由でヴァージニアを去る。そして 25 年後、あなたはそこに戻って来て、ジェファーソンがサリー・ヘミングスという奴隷の子供たちをすべて解放したのだということを知る。あなたは、25 年前に耳にした噂を本当であったと思うか、嘘だったと思うか。

トーマス・ジェファーソンとサリー・ヘミングスの子孫、消息のわからなくなったビバリーとハリエットを除いてであるが、彼らは今では総勢千人を越えている。トム²⁰の子孫、マディソンの子孫、エストンの子孫。そのほとんどが今ではオハイオ州チリコーテに暮らしているが、彼らは DNA 以前にはお互いに会ったこともなかったという。にもかかわらず、それぞれの家系に伝わるオーラル・ヒストリーは全く同じものであった。つまり、ジェファーソンとヘミングスが彼らの祖先だということ、彼らがどのようにしてこの世に現れたのかということについて。私が感銘を受けたのは、ジェファーソンとヘミングスの子孫たちのほとんどが、ジェファーソンを自分たちの祖先に持っていることではなく、サリー・ヘミングスを祖先としていることに誇りを持っていたことである²¹。白人社会にパスしたエストンの子孫の一人であるジュリアとドロシー親子は、先述したフォーン・ブローディー女史によるジェファーソンの伝記が出版された 1974 年になって初めて自分たちの祖先は黒人であったことを知り、彼らはそれを誇りに思ったのだと言う。次に挙げるものはドロシー自身の証言である。

My name is Dorothy Jefferson Westerinen and I am the great-great-great granddaughter of Eston Hemings Jefferson, who was Thomas Jefferson and Sally Hemings' youngest child. My uncle, John Weeks Jefferson, supplied blood in 1998 for Dr. Foster's DNA test, which resulted in proof, for the first time in 200 years, that Jefferson and Hemings did indeed have an affair that resulted in at least one child, Eston. My branch of the family had "passed" into white society long ago, and knowledge of our African-American heritage was lost to us until 1974.....

Because of the way Jefferson has been turned into an American icon, history has not been kind to Sally Hemings. For countless years, historians who want the story of her affair with Thomas Jefferson whitewashed have smeared her name. But when I think of my grandmother, I see her raising her children to look to the future and overcome the burden of slavery. I see her as a strong woman who turned her affair with Jefferson into a ticket to freedom for her children. Now, America will see her that way too.²²

現在のところ、ジェファーソン研究家の中では第一人者として挙げられるジョゼフ・エリス(Joseph J. Ellis)

は、Jefferson - Hemings affair を否定していたものの²³、DNA 以降はその態度を 180 度転換させた。彼は、DNA 鑑定では偶然の一致が起こるといふことは千分の一よりも確率が低いと述べ、この結果にはかなりの説得力があるということを示しながら認めたのである²⁴。しかし、エリスはそれを是認しながらも、ジェファースンにたとえサリー・ヘミングスという奴隷の愛人がいたとしても、独立宣言の起草、ルイジアナ購入、ヴァージニア大学の設立など様々な偉業を成し遂げた大統領としての偉大な功績には何ら影響を及ぼさないと断言している。いかにも権威主義的な白人研究者の見解。エリスの見解の裏を返せば、白人たちがジェファースンにはサリー・ヘミングスという奴隷の愛人がいたということ認めざるをえなかったものの、何とかしてその事実に理由付けをして、「不都合なアメリカ史」を「回避」せねばならなかったのだということを示していると言えよう。そのために、ヘミングス一族の人々はそのアイデンティティと尊厳を譲渡しなければならなかったのだ。DNA 以前ではサリー・ヘミングスの存在を黙殺し、DNA 以降ではジェファースンの身代わりが次から次へと現れるというように、アメリカはたった一人の人物の名誉を守るために、多くの人々の尊厳を、しかもその人物の子孫の尊厳を犠牲にしてきたのである。だが、当のジェファースンはそのようなことを望んでいたのだろうか。彼は如何なる政治的な状況にあらうともサリーをモンティチェロに置いていた。カレンダーによってその関係が発覚した時でも、彼は彼女を売り飛ばさなかった。彼は否定も肯定もせず、沈黙を守り通したのだ。この「沈黙」が否定を意味したのか、是認を意味したのかは、今の我々には知る由もないことであるが。しかし、ジェファースンは確実にサリーの 5 人の子供たちを約束通りに自由にしたのだ。南北戦争以前の南部では奴隷主が女奴隷に子供を産ませることは当たり前であり、生まれた子供を自己所有の動産奴隷にするか、あるいは競売にかけて売り飛ばすことは常識であった。そのような中であって、ジェファースンは所有の「財産」である子供たちを 5 人も解放したのである。その当時、ジェファースン自身は多額の借金を抱えていて、それだけに自己財産である「奴隷」の存在は重要であったにもかかわらず、彼は 5 人もの「財産」を手放したのだ。この「解放」があったからといって、必ずしも彼がその子供たちの父親であるとは限らないという歴史家も多く存在したし、今も存在する。しかし、私はそうは思わない。ジェファースンは彼らをただ「解放」してやっただけではないのである。これから「逃亡」しようとする奴隷に馬車や金銭を与える行為を彼らはどう解釈するのか²⁵。それは、ジェファースンがサリーに示し得た唯一の愛情表現だったのではないのか。当時の社会における因襲や規制の中で、ジェファースンが彼女に対して出来たことはそれしかなかったのではないのか。ジュリアとドロシーの親子が語ったように、ヘミングスの子孫たちはサリーの子孫であることに誇りを持っている。彼らは、奴隷主の「搾取」の結果ではなく、「愛情」の結果として自分たちがこの世に生まれてきたのだということを感じているのである。エリスの言うように「サリー・ヘミングスという愛人がいたとしても」ではなく、「サリー・ヘミングスという女性を愛したからこそ」、アメリカ合衆国の聖人としてのジェファースン以上に、人間ジェファースンとしての重みが出てくるのではないのか。たとえそれが、21 世紀の現代に生きる我々には到底理解しえない「愛し方」であったとしても。

終わりに

ヴァージニア州アルビマーレ郡にトーマス・ジェファースンのプランテーションはある。イタリア語で「小さな山」を意味する「モンティチェロ」(Monticello)のマンション(屋敷)は、ジェファースンが 40 年をかけて建築したというように建築学上でも驚くべき芸当である。かつて、この屋敷のダイニング・ルームにアメリカを作った男たちが集まってきては自由と民主主義について討論していた。「我々人民は…」という具合に。しかし、そのテーブルについていた人々ジョン・アダムス(John Adams, 1735-1826)、ジェームス・マディソン(James Madison, 1751-1836)、トーマス・ペイン(Thomas Paine, 1737-1809)など数え切れぬ男たち一のことを考える時、私は彼らに給仕した人々のことを思わずにはいられない。料理やワインの用意をし、ベッドをこしらえ、馬の手入れをするなど、モンティチェロで彼らに仕えた人々彼らもまた「我々人民」ではなかったのか・・・いや、そうではない。これらの人々は独立当時のアメリカ合衆国が掲げていた「自由」や「平等」という理念からは消し去られた人々、アメリカという国家の創造の過程で否定され、無視された人々だった。彼らは人間ではなく、ジェファースンの動産に過ぎなかったから。

サリー・ヘミングスは 1830 年にアルビマーレ郡のセンサス・テーカーによって白人のリストに加えられている²⁶。それは、ジェファースンを「異人種混合」の罪から守るための処置であったことは言うまでもない。だがこれは、生涯を「黒人」として生き抜いた彼女にとっては最大の悲劇だったと言えるだろう。トーマス・ジェファースンの死後、彼女は息子のマディソンとエストンとともにモンティチェロから程近いシャーロットヴィルの町にあった粗末な小屋で暮らしていた。娘のマーサによって解放され、自由の身であったことは

先に述べたとおりであるが、当時、解放された奴隷はヴァージニアを去らなければならないという法律があった。にもかかわらず、なぜサリーは法を犯してまでそこに留まっていたのか。それは彼女のジェファースンへの思慕の表れに他ならない。1835年に62歳で亡くなった時、サリー・ヘミングスはその小屋の裏庭に葬られたが、現在ではそこは「ハンプトン・イン」というホテルになっている。建設時にブルドーザーがそこを掘り起こした時、サリーの遺骨がどこにいつてしまったのか、今となってはそれを知る術はない。

かつてモンティチェロの奴隷たちの小屋が並んでいたマルベリー・ロウ (Mulberry Row) を抜け、緩やかな坂道を下っていくと、ジェファースン一族の墓地があり、その中でも一際目立つ荘厳な墓石の下で三代大統領は眠っている。だが、サリーには墓も記念碑も存在しない。確実なことは、彼女がモンティチェロの奴隷であったということだけである。これは、アメリカにおいて奴隷の価値がどれほどのものであったかということ物語っているとも言えよう。DNA以降、サリー・ヘミングスの名前は特有の位置に据えられるようになったのかもしれないが、言い換えるなら、それは彼女自身がアメリカが国家ぐるみで犯してきた罪、つまり、人種偏見を象徴する存在になったということでもあろう。「歴史の真実」は語られない「歴史」の中こそ存在する。Jefferson-Hemings affair が我々に提供している問題は、白人アメリカのアイコンとして存在するトーマス・ジェファースンの名誉、あるいはその白人の子孫たちの名誉の問題ではなく、サリー・ヘミングスの子孫を中心としたアメリカ黒人の問題なのである。今ようやくにして、サリー・ヘミングスの存在はアメリカ史の中に顕現し、「人」が「人」として生きることの意義を我々に問いかけるのである。

Works Cited and Consulted

Books and articles

- Abbey, David M. "The Thomas Jefferson paternity case" in *Nature*, vol.397. 7 Jan.1999.32-33.
- Adair, Douglas. *Fame and Founding Fathers*. Williamsburg: W.W.Norton, 1874.
- Adams, M.V. *The Multicultural Imagination:Race, Color and the unconscious*. London: Routledge, 1996.
- Allen, Ray Hoyt. *An Historiographical Survey:Thomas Jefferson and Sally Hemings*. California State University, ph.D., 1994.
- Andrews, Tena. *Sally Hemings:An American Scandal—The Struggle to Tell the Controversial True Story*. New York: The Malibu Press, 2001.
- Ballagh, James C. *A History of Slavery in Virginia*. Baltimore:John Hopkins Press,1902.
- Bear, James A. *Jefferson at Monticello*. Charlottesville:The University Press of Virginia,1967.
- . "The Hemings Family at Monticello" in *Virginia Cavalcade*, vol.24, Autumn, 1970. 78-87.
- Beatty, James Paul. *Thomas Jefferson and Slavery*. The North Texas State University, Ph.D., 1973.
- Betts, Edwin Morris, ed. *Thomas Jefferson's Farm Book*. Charlottesville: Thomas Jefferson Memorial Foundation, 1999.
- Binder, Frederick M. *The Color Problem in Early National America as Viewed by John Adams, Jefferson and Jackson*. Hague:Mouton, 1968.
- Boorstin, Daniel J. *The Americans:The Colonial Experience*. New York: Random House,1958.
- . *The Lost World of Thomas Jefferson*. New York: Henry Holt and Company, 1948.
- Brodie, Fawn M. "The Great Jefferson Taboo" in *American Heritage* 13. pp.97-100.
- . *Thomas Jefferson:An Intimate History*. New York:Norton, 1974.
- . "Thomas Jefferson's Unknown Grandchildren" in *AmericanHeritage*27 pp.94-99.
- Burstein, Andrew. "Jefferson's Rationalizations" in *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol.LVII no.1, Jan.2000. pp.184-197.

- Campbell, J. *The Hero with a Thousand Faces*. New Jersey: Princeton University Press, 1968.
- Chase-Riboud, Barbara. *Sally Hemings*. New York: St. Martin Griffin, 1974.
- Collier, E. "Paradox in Paradise: The Black Image in Revolutionary America" in *the Black Scholar* 21. pp.2-9.
- Dabney, Virginius. *The Jefferson Scandal: A Rebuttal*. New York: Madison Books, 1981.
- Davis, Richard Beale. *Intellectual Life in Jefferson's Virginia, 1790-1830*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1964.
- Ellis, Joseph J. *American Sphinx: The Character of Thomas Jefferson*. New York: Vintage Books, 1996.
- . "Jefferson: Post-DNA" in *William and Mary Quarterly*, 3rd vol.57. no.1. 2000. 125-138.
- Finkelman, Paul. *Slavery and the Founders: Race and Liberty in the Age of Jefferson*. New York: M.E.Sharpe, 2001.
- Foster, Eugene A. "Jefferson fathered slave's last child" in *Nature*, vol.396. 5 Nov. 1998. 27-28.
- Frederickson, George M. *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914*. New York: Harper & Row, 1971.
- Freehling, William W. "The Founding Fathers and Slavery" in *American Historical Review*, vol.77 no.1, Feb. 1972. pp.81-95.
- Gordon-Reed, Annett. *Thomas Jefferson and Sally Hemings: An American Controversy*. Charlottesville: The University of Virginia, 1997.
- . "Engaging Jefferson: Blacks and the Founding Father" in *William and Mary Quarterly* 57. pp.171-182.
- Gruber, Anna. *The Archaeology of Mr. Jefferson's Slave*. University of Delaware, Ph.D., 1995.
- Handlin, Oscar. *Race and Nationality in American Life*. Boston: Little, Brown, And Company, 1948.
- Hemings, Madison. "The Memoirs of Madison Hemings" in *Pike County (Ohio) Republican*, March 13, 1873.
- Holland, Arthur Ca. *The Anti-Slavery Activities of Thomas Jefferson*. The University of Chicago, ph.D., 1927.
- Jefferson, Isaac. "Memoirs of a Monticello Slave" in *William and Mary Quarterly* vol.8 no.4
- Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia* in *Jefferson Writings*. New York: The Library of America, 1984.
- Johnston, James Hugo. *Race Relations in Virginia and Miscegenation in the South, 1776-1860*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1970.
- Jordan, Winthrop. *White over Black: American Attitudes toward the negro 1550-1812*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1968
- . *The White Man's Burden: Historical Origins of Racism in the United States*. New York: Oxford University Press, 1974.
- Justus, Judith P. *Down from the Mountain: The Oral History of the Hemings Family*. Ohio: Leshner Printers, 1990.
- Kennedy, Roger G. *Mr. Jefferson's Lost Cause: Land, Farmers, Slavery, and the Louisiana Purchase*. New York: Oxford University Press, 2003.
- Koch, Adrienne. *Power, Morals and the Founding Fathers: Essays in the Interpretation of the American Enlightenment*. Ithaca: Cornell University Press, 1961.
- Kuper, Theodore Fred. *Thomas Jefferson and Slavery*. New York: New York State Bar Association, 1970.
- Langhorne, Elizabeth. *Monticello: A Family Story*. Chapel Hill: Algonquin Books,

1987.

- Lanier, Shannon and Jane Feldman. *Jefferson's Children: The Story of One American Family*. New York: Random House, 2000.
- Lemire, Elise Virginia. *Making Miscegenation: Discourses of Interracial Sex and Marriage in the United States, 1790-1865*. The State University of New Jersey, Ph.D., 1996.
- Lewis, Jan Ellen and Peter S. Onuf, ed. *Sally Hemings & Thomas Jefferson: History, Memory, and Civic Culture*. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1999.
- . "American Synecdoche: Thomas Jefferson's Image, Icon, Character, and Self" in *American Historical Review*, vol.103 no.1, Feb.1998. pp.125-136.
- Lynd, Staughton. *Class Conflict, Slavery, and the United States Constitution*. New York: The Bobb-Merrill Company, 1967.
- Malone, Dumas. *Jefferson the President, First Term 1801-1805*. Boston: Little Brown and Company, 1970.
- . *Jefferson the President, Second Term 1805-1809*. Boston: Little Brown and Company, 1974.
- . *Jefferson: The Sage of Monticello*. Boston: Little Brown and Company, 1977.
- Malone, Dumas and Steve H. Hoghman. "A Note on Evidence: The Personal History of Madison Hemings" in *The Journal of Southern History*, vol.XLI no.4, Nov. 1975. pp.523-528.
- Mayo, Bernard and James A. Bear, Jr. *Thomas Jefferson and His Unknown Brother*. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1981.
- McColley, Robert. *Slavery and Jeffersonian Virginia*. Urbana: University of Illinois Press, 1964.
- McLaughlin, John. *Jefferson and Monticello: The Biography of a Builder*. New York: The Owl Book, 1988.
- McMurry, Rebecca L. and James F. McMurry. *Anatomy of a Scandal: Thomas Jefferson and the Sally Story*. Pennsylvania: White Mane Book, 2002.
- . *Jefferson, Callender and the Sally Story: The Scandalmonger and the Newspaper War of 1802*. Virginia: Old Virginia Books, 2000.
- Mellon, M. *American Views on Negro Slavery*. Boston: The Meador Press, 1934.
- Miller, John Chester. *The Wolf by the Ears: Thomas Jefferson and Slavery*. London: The Free Press, 1977.
- Morgan, Edmund S. "Slavery and Freedom: the American Paradox" in *Journal of American History* 59 (1972). Pp.313-329.
- Natinal Archives. *Fifth Census of the United States 1830: Population Schedules Virginia vol 9*. Washington: The National Archives, 1946.
- Natinal Genealogical Society. *Jefferson- Hemings: A Special Issue of the National Genealogical Society Quarterly*. Arlington: National Genealogical Society, 2001.
- Neiman, F.D. "Coincidence or Causal Connection: The Relationship Between Thomas Jefferson's Visit to Monticello and Sally Hemings's Conceptions" in *William and Mary Quarterly* 57. pp.198-210.
- O'Brien, C. "Thomas Jefferson: Radical and Racist" in *the Atlantic Monthly* 278. pp.53-74.
- Onuf, Peter S, ed. *Jefersonian Legacies*. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1991.
- . "Every Generations Is an 'Independent Nation': Colonization, Miscegenation, and the Fate of Jefferson's Children" in *William and Mary Quarterly, 3rd series*, vol.LVII no.1, Jan. 2000. pp.154-170.
- Perdue, Charles L. *The Negro in Virginia*. North Carolina: John F. Blair Publisher,

1994.

- Peterson, Merrill D. *The Jefferson Image in the American Mind*. New York: Oxford University Press, 1960.
- . *The Jefferson Image in the American Mind*. Charlottesville: Thomas Jefferson Memorial Foundation and University Press of Virginia, 1998.
- Randolph, Sarah N. *The Domestic Life of Thomas Jefferson*. Charlottesville: The University of Virginia, 1978.
- Rothman, Joshua D. *Notorious in the Neighborhood: Sex and Families across the Color Line in Virginia, 1787-1861*. Chapel Hill: University of North Carolina, 2003.
- Russell, John H. *The Free Negro in Virginia, 1619-1865*. Baltimore: John Hopkins Press, 1913.
- Sanford, Douglas Walker. *The Archaeology of Plantation Slavery at Thomas Jefferson's Monticello: Context and process in an American Slave Society*. University of Virginia, ph.D., 1995.
- Schwarz, Philip J. *Slave Laws in Virginia*. Athens: The University of Georgia Press, 1996.
- Sheehan, Thomas F. ed. *Thomas Jefferson/Sally Hemings Two Hundred Years of Controversy*. Keswick: Keswick House, 1999.
- Shine, Duck Ann W. *Ancestral Echoes and Modern Voices: The Family Story of Thomas Jefferson and Sally Hemings*. Pacifica Graduated Institute, ph.D., 2001.
- Sloan, Samuel H. *The Slave Children of Thomas Jefferson*. Santa Monica: Kiseido Publications, 1998.
- Stamp, Kenneth M. *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*. New York: Alfred A. Knopf, 1956.
- Stanton, Lucia. *Slavery at Monticello*. Charlottesville: Thomas Jefferson Memorial Foundation, 1996.
- . *Free Some Day: The African-American Families at Monticello*. Charlottesville: Thomas Jefferson Memorial Foundation, 2000
- . "The Other End of Telescope: Jefferson through the Eyes of His Slave" in *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol.LVII no.1, Jan, 2000. pp.140-152.
- Thomas Jefferson Heritage Society. *The Jefferson-Hemings Myth: An American Travesty*. Charlottesville: Jefferson Editions, 2001.
- Vaughn, Alden T. "Blacks in Virginia: A Note on the First Decade" in *William and Mary Quarterly* 29. pp.469-478.
- Wertenbaker, Thomas Jefferson. *The Planters of Colonial Virginia*. New York: Russell & Russell, 1959.
- Wilkins, Roger. *Jefferson's Pillow: The Founding Fathers and the Dilemma of Black Patriotism*. Boston: Beacon Press, 2001.
- Williamson, Joel. *New People: Miscegenation and Mulattoes in the United States*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1995.
- Woodson, Byron W. *A President in the Family: Thomas Jefferson, Sally Hemings, and Thomas Woodson*. Connecticut: Westport, 2001.

Web sites

- "The Jeffersonian Perspective: Jefferson's DNA and Sally Hemings"
by Eyler Robert Coates, Sr.
(<http://www.geocities.com/CapitolHill/7970/jefpnote.htm>)
- "Research Report on the Jefferson-Hemings Controversy: A Critical Analysis"
by Eyler Robert Coates, Sr.

(<http://www.angelfire.com/va/TJTruth/rebuttal.htm>)

“The Jefferson-Hemings DNA Study as told by Herbert Barger, Jefferson Family Historian” by Herbert Barger

(<http://www.angelfire.com/va/TJTruth/background.htm>)

“Statement on the TJMF Research Committee Report on Thomas Jefferson and Sally Hemings” by Thomas Jefferson Memorial Foundation

(http://www.monticello.org/plantation/hemings_report.htm)

Video tapes

Sally Hemings: An American Scandal by Tena Andrews (Artisan, 2000)

Jefferson in Paris (Merchant Ivory Productions, LTD, 1995)

Jefferson's Blood, produced and directed by Thomas Lennon:

written by Shelby and Thomas Lennon (PBS video, 2000)

A View from Mountain, writer: Martin Doblmeier, editor: Timothy A. Finkbiner

Executive producer: Charles W. Sydnor (Richmond, Virginia: Central and Northern Public Television, 1995)

Thomas Jefferson by K. Burns (New York: PBS Home Video, 1996)

“Jefferson's Children in Black and White” by Shannon Lanier and Jane Feldman, Charlottesville: University Relations, Television News Office, University of Virginia, 2002.

“The intersection of science and history and the Thomas Jefferson and Sally Hemings story” Lecture by Eugene A. Foster given at Alumni Hall, University of Virginia, September 27, 2000.

(University Relations, Television News Office, University of Virginia)

Notes

¹ *Washington Post, the New York Times, Chicago Tribune, etc.*

² トーマス・ジェファーソンとマーサ・ウェルズ・ジェファーソン夫妻の間には、1777年5月に息子が生まれているが、その子は翌月に亡くなっている。

³ トーマス・ジェファーソンの子孫やジェファーソンの支持者たちは、サリーと関係があったのはジェファーソンではなく、ジェファーソンの甥のカー兄弟であったと以前から主張していた。1998年のDNA鑑定によって、彼らの言い訳が全くのどっち上げであったことが明らかになった。

⁴ 白人のヘミングス船長とフル・ブラッドの黒人女性の間にも生まれたエリザベスはミュラト（mulatto）と呼ばれる混血であった。白人と黒人の間で、二分の一の混血をミュラト、四分の一をカドルン（quadroon）、八分の一をオクトルン（octoroon）という。南北戦争以前では、黒人の血が十六分の一以下の場合、白人と見なされた。一滴でも黒人の血が入っていることによって、黒人の範疇に加えられるようになったのは南北戦争以降のことである。

⁵ ヴァージニア州アルビマーレ郡（Albemarle County, Virginia）にあるトーマス・ジェファーソンのプランテーション。現在ではユネスコの世界遺産にも登録されている。

⁶ “Memoirs of a Monticello Slave” in *William and Mary Quarterly*, vol.8, no.4.

⁷ フランス革命が勃発したのは、1789年7月である。

⁸ “Memoirs of a Monticello Slave”

⁹ 本紙は、ヴァージニア大学アルダーマン・ライブラリー内（Alderman Library, University of Virginia）のスペシャル・コレクション（Special Collections）に所蔵されており、現在でも閲覧可能である。

¹¹ *Richmond Recorder*, September 1, 1802.

¹² miscegenation, いわゆる「異人種混合」は当時のヴァージニアでは違法であった。

¹³ トーマス・ジェファーソンが友人のジョン・ウォーカー（John Walker）の妻であるベティ・ウォーカー（Betty Walker）を誘惑したのは1768年頃であった。

¹⁴ 1776年の大陸会議（the Continental Congress）において、ジェファーソンが記述したところの「奴隷制廃止」の箇所に向って異議を唱えた州は、ジョージアとサウス・キャロライナである。この2州は奴隷制廃止に関する箇所を独立宣言から削除しない限りは、会議自体から退席するという始末であった。

¹⁵ Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia* in *Jefferson Writings* (New York: The Library of America, 1984), pp.264-265.

¹⁶ Madison Hemings, "The Memoirs of Madison Hemings" in *Pike County (Ohio) Republican*, March 13, 1873.

¹⁷ 厳密には七人の子供が生まれているが、二人の娘は生後間もなく死亡している。

¹⁸ 肌の色が極めて薄い黒人が、その素性を隠して白人として生きることを「パッシング」(passing)という。

¹⁹ 当時のヴァージニア州の奴隷法では、解放された奴隷は他州に去らねばならなかった。ジェファーソンがヘミングスを解放しなかった、あるいは解放できなかった理由はこのことから推測できるだろう。

²⁰ トムの存在については現在でも論争が続いている。マディソン・ヘミングスの回想録ではジェファーソンとヘミングスの長男とされているトムは生後間もなくして亡くなったことになっているし、それ以上に例のDNA鑑定の結果、トムの子孫とジェファーソン家の子孫の間には血縁関係がないということが判明したからである。しかしながら、これは複雑極まりない問題であるので、本稿ではあえて触れないことにする。

²¹ *Jefferson's Blood*(videotape), produced and directed by Thomas Lennon; written by Shelby Steele and Thomas Lennon. PBS video, 2000.

²² Tina Andrews, *Sally Hemings: An American Scandal—The Struggle to Tell the Controversial True Story*—(New York: The Malibu Press, 2001), pp.87-88.

²³ Joseph J. Ellis, *American Sphinx: The Character of Thomas Jefferson* (New York: Vintage Books, 1996), p.126.

²⁴ Joseph J. Ellis, "Jefferson" in *William and Mary Quarterly*, 3rd vol.57, no.1, 2000. pp.125-138.

²⁵ サリー・ヘミングスの姉クリッタ・ヘミングス(Critta Hemings)の息子ジェイミー・ヘミングス(Jamy Hemings)、つまりサリーから見ると甥に当たるが、彼が「逃亡」した時にはジェファーソンは早々に彼を捕えるよう手配している。ジェイミー・ヘミングスの逃亡は、もちろん文字通りの「逃亡」であった。

²⁶ *Fifth Census of the United States 1830: Population Schedules, Virginia vol.9* (The National Archives, 1946)